

酒巻久著「朝イチでメールは読むな! - 仕事ができる人になる 41 の習慣 - 」

朝日新書 2010年3月30日刊を読む

1. 大人になってからの再勉強に最適な教科書とは？

- (1)大人になってから基礎的な勉強をし直すには、「高校の教科書」が最適だ。
- (2)私はキヤノンに入社後、大学の工学部を出ていながら、電気や物理、化学などの基礎ができていないことを痛感した。そこで、工業高校の教科書を入手して読み直し、改めて勉強し直した。
- (3)実は、高校の教科書レベルの基礎的なことがわかっているならば、世の中の仕事はたいてい何とかなる。我々のようなメーカーの開発部門でも、高校の電気や物理、化学などをきちんと理解していれば、十分やっていけるものなのだ。
- (4)だから、私が開発部門にいたときは、部下の育成のために、必ず高校の教科書でもう一度勉強させた。すると名のある大学を出ている人間でも、意外と基礎的な知識で抜けている部分があることを発見して、「これではダメだ」と自ら再勉強するいいきっかけになるのだ。
- (5)何かを勉強しようと思ったとき、すぐにその分野の専門的な書籍に手を伸ばす人がいるが、それはやめたほうがいい。その分野の基礎的な知識があって読むならいいが、そうでないなら、難しすぎて、1章も読まないうちに放り出すに決まっているからだ。
- (6)高校の教科書にないようなジャンルの勉強をするときは、子ども向けに書かれた、その分野のやさしい入門書から入るといい。
- (7)たとえば、私が80年代に環境経営の勉強を始めたときは、日本に適当な本がなかったので、最初は環境問題について英語やドイツ語で書かれた外国の子ども向けの入門書を利用した。子ども向けなので、英語はそれほど難しくなく、ドイツ語も辞書を片手に読めば何とかだった。
- (8)いまは当時に比べて、外国の子ども向けの入門書も、いろいろな分野で日本語に翻訳されるようになってきているから、日本の本で適当なものがない場合は、それら翻訳書を利用するといい。
- (9)いずれにしても最初は子ども向けに書かれた入門書で勉強するのが一番だ。そのほうが断然わかりやすく面白いから、理解も進むし、勉強も長続きする。
- (10)そうやって基礎の基礎を学んだら、岩波や中公、講談社ブルーバックスなどの新書を手に取り

る。新書もずっと読める簡単なものから専門書レベルの難しいものまであるので、自分の理解に応じて読み進めるようにする。

(11)とにかく大事なことは、どのような分野であれ、まずは子ども向けの入門書で基礎の基礎を学ぶことだ。「そんなことはわかっているから」と基礎の基礎を飛ばしてしまって、いきなり難しいことを覚えようとすると、たいてい勉強は失敗する。

(12)学校でも勉強のできる人は、教科書をわかるまできちんと学ぶ。ところが、勉強のできない人に限って難しい参考書を何冊も買い込んで、ちょっと読んだだけで放り出してしまうことが多いものだ。難しい参考書は内容が盛り沢山で、それを読み通すことができれば確かに力がつくが、いきなり読んでも消化不良を起こすだけだ。

(13)だから、何か新しいことを勉強するときは、まず基礎の基礎をしっかり学ぶこと。その上で基礎を固めることである。「わかること」から勉強を始める、「高校の教科書で勉強」習慣は、理解を早め、勉強を長続きさせるコツである。

2. 「座学 実験 レポート」のサイクルに、もう一つ必要なこと

(1)勉強したことの理解を本当に深め、自分のものにするためには、これまで何度も述べてきたように「書くこと」も欠かせない。わかったつもりのことも、いざレポートなどに書こうとすると、理解できていない部分が浮き彫りになり、そこを勉強し直すことで、より深く理解することができるようになる。

(2)たとえば、キヤノン電子の新入社員研修は、午前中は座学、午後は実験、その日の夜にレポート提出と決まっている。この「座学 実験 レポート」のサイクルをまわすことで、それまで1年かかっていた研修が1ヵ月で済むようになった。座学では理屈でしかわからないことも、実験をすれば、体験的に覚えることができる。

(3)さらにそれをレポートにまとめることで、その日学んだことが整理され、理解も進む。「レポートを書いてまとめる」習慣があれば、理解の深さ、知識の身につけ方が違ってくるのだ。

(4)また、そうやってレポートを提出しなければならないとなれば、座学や実験にもいっそう身が入る。そしていいレポートを書いた人間は、ちゃんと評価して褒め、理解が足りないと思う人間には、さらなる努力を促す。

(5)まさに山本五十六の「やまもといそろくやってみせ、言って聞かせて、させてみせ、褒めてやらねば、人は動かじ」である。

(6)「座学 実験 レポート」のサイクルに、もう一つ付け加えると飛躍的に理解が深まることが

ある。それが「読書」だ。このサイクルで学んだことに関する本や、それを少し広げたり深めたりした関連書籍を買ってきて読む。そうすることで、学んだことが「体系化」されて理解できるのだ。

(7)本というのは、その本の中で、内容が論理に則^{のつと}って体系化されている。それを読むことで、自分の理解の度合いをより客観的に知ることができる。そして、自分の理解の度合いも含めて、知識を体系化して把握することが可能となるのだ。

(8)会社の研修にプラスして、関連する本を読むかどうか。それを習慣化できるかどうか、5年後、10年後に大きな差となって表れてくる。

P159 ~ 164

[コメント]

だから、小学校、中学校、高校の教科書や資料集は絶対に捨てないほうがよいと、著者の酒巻さんに言われた。その通りだと思う。

- 2010年8月4日林 明夫記 -